守統治エリートらによって用いられたのが、復古的で排他的なナショナリズムであったというわけだ。格差社会を是正する代わりに、日の丸を振らせ君が代を歌わせ、日本人としての誇りを持てと、排外的なヘイトさえ扇動し国民統合を図るのだ。それを裏で支えていたのが、統一教会などの宗教右翼であり、「裏金」であったことは再三、強調しておく必要がある。

（なかの・こういち／上智大学教授）

# 特集1 「終わらない」戦争Ⅱ

## 遺書展パネル：朝日ギャラリー遺書・遺品展の構成

# 平和のための遺書・遺品展の記録――図録を「読む」

岡田 裕之

昨年の「学徒出陣」80周年記念の「平和のための遺書・遺品展」は、1943年10月21日、文部省他が主催した明治神宮外苑競技場における「出陣学徒壮行会」に合わせて、「わだつみのこえ記念館」が20～24日の5日間、朝日ホールで主催したものである。焦点はここにあったので、「学徒出陣」につき、深い内容の文章を遺した、松岡欣平と佐々木八郎の遺書を展示の軸に据えた。

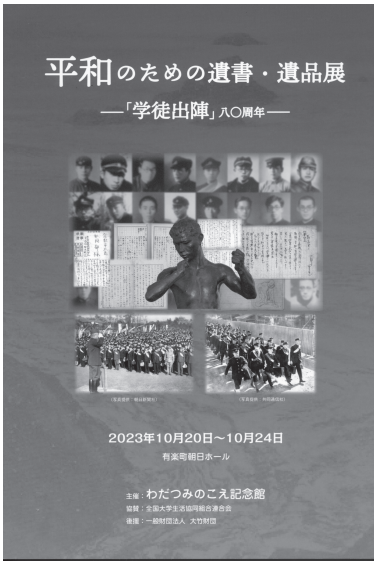
二人とも『はるかなる山河に』1947年、から『きけわだつみのこえ』1949年（以下『こえ』と略す）、に採録されているから、御存じの方が多いと思うが、松岡はそこで、映画『無法松の一生』の原作を想起しつつ、映画の主人公のように「提灯行列がしたい、太鼓を叩きたい」、と叫び、戦争を呪い、日本がなお自由主義だった時代を回顧する。画像と音響と思想が響き合う感動的な文章である。松岡は自分でも認めているように「映画好き」でのめり込み過ぎないよう自戒しているが、戦中のフランス映画『白鳥の死』の批評など見事だ。

図録では、この『こえ』の印象的な文章ではなく、9月27日から11月に至る、論文でも回顧でもあり日録でもある46枚に及ぶ長文の「日記集」を、その論理構成に従って再現すべく努めた。本旨は「出陣」にあたっての「反戦」の表明だが、国家が学徒に死を求める時、掲げる目的が実現可能なのか。「その大東亜の建設、日本の隆昌が遂げられたら死者又瞑すべし。若しそれが成らなかったらどうなるのだ。死んでも死にきれないではないか。政府よ、日本が現在行ってゐる戦は勝算あってやってゐるのであらうか」。松岡は問い詰める（65頁）。

長文は、9月27日（23日、学徒徴兵猶予停止の政府決定）、10月2日、猶予停止の緊急勅令、21日、靴ずれで壮行会参加を断念、25日、夜行列車で徴兵検査のため本籍地富山県へ向かう、車中、徴兵検査の学徒同士で壮行会の「生等もとより生還を期せず」との江橋慎四郎の答辞などを議論、途次、関温泉で一泊、11月9日、帰京（この経過は図録で一部紹介、66頁）。松岡は長文の結論を述べる。「現在の人間の最も願ってゐるものは平和である。戦争は人殺し、そこに倫理はない」（67頁）。

佐々木は、11月、第一高等学校クラス会の壮行会において、宮沢賢治の『烏の北斗七星』に寄せて、「愛」と「戦」と「死」という文章を公表、朗読した。そこで彼は「国籍が異なるだけで人を憎み殺すことはできない、憎むことの出来ない敵を殺さないで済むような世界のためには死んでもよい」と宣言した。学徒出陣に当たって心中はともかく、「反対」を明言した文章はこれが唯一のものであろう。この名文は『はるか』の冒頭を飾り、『こえ』にのっている。

図録はここで、「愛」と「戦」と「死」の文章で見逃されてきた末尾の「生産力と経済倫理」という自分の研究ノート（論文）を参照すべきとする注記を重視し、この「生産力と経済倫理」を縮約した、1943年5月14日の「日記」を復元紹介する。記念館は佐々木の分厚い研究ノート群を保有するが、未公開で一般には参照し難いから、日記を採録している『こえ』を手掛かりにする。




日記（当該研究ノート論文の縮約）の主題は「アダム・スミスへの回帰、Rückkehr zu Adam Smith（ドイツ語）」で、図録51頁の図版から読み取れる。『こえ』からもわかるように、佐々木はマルクス『資本論』の熱心な読者で、これを高く評価していた。ついでながら説明を加えると、当時『資本論』は禁書ではあったが素人向けの本ではなく、高畠の訳本は手に入ったし、私も中学生ながら松浦訳を眺めていた。だが難解で本書が「危険思想」とは思えなかった。父の本棚にはマルクス主義文献が数十冊無造作に並んでいた。戦中でも多くの東大経済学部生はマルクスを勉強していた。だが同時に「来るべき社会、将来社会」については必ずしもマルクス主義を支持せず、『こえ』に見るように、佐々木は戦後マルクス経済学者として大成する大内力氏（友人）と対立した。佐々木は現在の戦争、進行中の第二次世界大戦、は列強ブロック間の戦争であって、終結後に平和的な国際分業が来るやも知れないと考えたのであろう。そこでマルクス的な共産主義ではないスミスの世界を描いた。彼はそれを「愛のエトス（社会倫理）」と表現したり、「全体主義」と言ったりしていて、一義的ではない。戦中1940年代、東大では新進の大河内一男氏はスミスの『道徳感情論』を、大塚久雄氏はウェーバー『プロテスタンティズムの倫理（エトス）と資本主義の精神』を、紹介していた。

佐々木の思想でもう一つ重要なのは、自分には経済学徒として「生産力と経済倫理」を書き遺す義務と、日本社会内で生きてきた自分が国民の一員としては戦場に赴く義務があるとする。彼はこの「二つの責務」の双方を同時に果たすべき、と考えていた。佐々木は戦死の可能性の高い海軍飛行専修予備学生を志願し、1945年4月14日、沖縄海域で特攻戦死する。

＊佐々木の1943年5月14日日記の復元全文は、岡田裕之『日本戦没学生の思想』2009年、に掲載。

2．遺書展は遺品展でもあったので、小川清の返還遺品セット・図録63頁、奥村克郎と渡辺太平の返還日章旗・図録26頁、52頁、関口清の絵画・図録76～77頁、柳田陽一の学帽・図録17～18頁、が人目を引いた。

まず小川清の遺品セット（箱入り）だが、小川は早大出身の第14期海軍飛行専修予備学生で、45年5月11日、特別攻撃隊、第五昭和隊員として第13期の安則盛三機とともに沖縄本島東南海域で米大型空母バンカー

ヒルを攻撃突入し、炎上大破させ、戦場から脱落させた。航空機特攻の「成果」は日本側・米軍側双方の記録から推定すると、約15～17％である。突入以前に対空砲火で撃墜される特攻機は少なくなかったから、これは確認できた大成果である。小川機は艦橋に激突、空母乗員が小川遺品を保管。遺品は日系人を介して２００１年、遺族に返還された。M．ケネディ著「Danger's Hour」邦訳『特攻』は、この事件を詳細に分析した記録だが、氏の来日調査に際し、わだつみ会（一瀬智司・手塚久四）が学徒兵の記録に協力した。

さらに遺品には小川の胸ポケットに同期の特攻隊員・市島保男（早大）、柏倉繁次郎（早大）、平林勇作（法大）、茂木忠（台北帝大）の四人が写る一枚の写真があった。市島は谷田部（茨城県）航空隊で小川と親しく、出撃直前まで交友があった。茂木尚編『学徒出陣の証言、改訂版』（２０２１年、編者は茂木忠氏の甥で第14期生の記録を引き継ぐ）。茂木忠の学徒出陣期の記録は図録64頁。市島は、45年4月29日、先に沖縄海域で米機動部隊に突入戦死したが、図録54～55頁、いつも静かに書きものをしていたというほど、多くの日記を遺した。『こえ・第二集』には出陣時、女性から愛の告白を受け同時にそれが永遠の別離となる瞬間の記録がある。図録は、市島の最期の言葉として『聖書』マタイ伝の引用を記すが、クリスチャンである市島にとって祖国防衛の死は同時に自ら背負う「十字架」の死であった。

「人若し我に従はんと思はゞ己を捨て
己の十字架を負いて我に従へ」

遺品に戻ろう。関口の油絵は『おつかさん』と未完の『風景のなかの人物』だが、故野見山暁治画伯はこの未完の作品に関口の偉才を見る。しかし、来場者に最も強い印象を与えるのは45年7月、宮古島野戦病院で描いたスケッチ、「もうこれ以上やせられない」自画像と骨と皮の裸体の座像であろう。実物は手帳に描かれた小さなものだが、１９５０年5月、東京都の学生は米占領軍撤退を求めて、この「座像」を引き伸ばし巨大な「張りぼて像」に仕立て、デモ隊の先頭にして都心で占領下初めての反米行進を敢行した。

私が会場で解説と質問に答えるため説明していた時、関口の日記を食い入るように眺めて離れない年配の女性から「（関口に梅乾を与えた）この角田衛生兵を知っている」と言う。その角田衛生兵は生還したが、「これは私の知る角田衛生兵ではないか」と繰り返し聞いてくる。確答はもちろんできないのだが、先の戦争の犠牲者は多く、そのようすがを探し求める関係者は少なくなかった。

３．展示された遺書も説明する図録も、内容を「読み解く」には想像力が必要で、解釈力が求められる。主催者も解説に努めるがもどかしい。展示遺書のすべての解説はできないので、『こえ』の冒頭の上原良司と末尾の木村久夫の二人の遺書を解説して、図録の「読み」を締めくくる。

上原は『こえ』の戦没学生の中で最も「著名」かも知れない。出身校の慶応大学は上原の特別展示室を設けて称揚している。彼は特別攻撃出撃前夜、45年5月10日、報道班員の求めに応じて「所感」を認（したた）めた。彼は自分の自由主義の信念を述べ、「全体主義国家（伊独日）の滅亡と自由主義の勝利」を断言した。流れる如き論理と乱れなき立派な字である。図録62～63頁。8月、全体主義の日本は敗れ、戦後自由主義と平和主義に転換して再生する。『こえ』の冒頭を飾るにふさわしい。

学徒兵を受け入れた軍隊側は、学徒兵が受けてきた「自主的な思考」を否定し、上官の指揮命令に従順に従う兵士に鍛え直すべく訓練を施す。特に幹部候補生（陸軍見習士官）には軍隊教育は厳しく、時に経済的に恵まれてきた学徒兵に対する反感もあって暴力も揮われた。この教育課程で用

いられたのが上官に提出するために学徒兵が記す毎日の「修養録」であった。内務班の鉄拳殴打と「修養録」の検閲により、多くの学徒兵は「従順な軍人」に変質し、適応する。学生気分が抜けない（海上春雄、図録47～48頁）か、批判精神の強固な者（中村徳郎）は、いわば二重帳簿で上官の眼をのがれ、蜜かに本心を手帳（上村元太、図録34～35頁）や紙片（鷲尾克己、図録61頁）に書きつける。

上原の提出用『修養反省録』は別であった。そこでは自由主義の正しさが主張され、軍規の欺瞞が暴かれる。「（特別操縦見習士官は）一寸監視ノ目ガナイト、自分勝手ナコトヲスル。軍隊的ニ之ヲ観レバ零デアル。併シ乍ラ人間トシテ観ル場合、コレハ自由主義ノ充溢シタ証拠デアルカラ思想的ニ進歩シテキルト云ハネバナラヌ。」図録62頁。さらに上原は『修養反省録』で上官と言い争い、上官は赤字で上原を叱責する。これは貴重な記録で図録に採録したかったのだが、紙幅が足りず割愛した。『こえ・第三集』には採録したい。この上官との「論争」は、上原良司個人遺稿集『ああ祖国よ恋人よ』（1999年）、に掲載されているので参照されたい。

他方『こえ』の最後に置かれた木村久夫（京都帝大）の遺書は、戦犯に問われたシンガポール・チャンギ刑務所において、偶然入手した田辺元著『哲学通論』の余白に書き入れた遺言である。木村はそこで、1931年の満州事変以来の軍部の横暴とそれを許した日本国民の責任を詳細に論じつつ、戦後の自由で活気ある思想のもと復興に向かう祖国を展望する。だが、木村はインド洋に浮かぶ日本軍の占領地、カーニコバル島で島民宣撫と防衛に尽くしたばかりに、敗戦後、兵卒（上等兵）ながら参謀将校の島民殺害行為の責めを負わされて、絞首刑の判決を受ける。木村は、自由になった祖国に帰り自分の学問への熱い志を生かすことを願いながら、空しく報復の「死」の運命を与えられる。戦争の全経過を振り返り、戦後に希望を託して、自分は死ぬ。

木村の出身校、旧制高知高等学校（現高知大学）は木村が遺贈した書籍の「木村文庫」を設けているが、文庫はスミス、リカード、マルクスは言うまでもなく、ケインズからワルラスと広く古典と現状分析の書物、465冊から成る。生あらば木村はどれだけの学者となったであろうか。木村は歌人、吉井勇に私淑し優れた短歌を遺書に記す。

「明日と言ふ日もなき生命抱きつつ
　文読む心盡くることとなし」

図録には大阪朝日新聞社提供の『哲学通論』余白コピーの「遺墨」と母親宛軍事郵便葉書しかない。図録79頁。葉書には「此処（カーニコバル島）に来てからは（軍務は）全く専門に属する事なので、仕事に力が入ります。当地の経済状態、商業状態、政治・民族の社会科学的の観察が今の私の仕事と為ってゐます。殊に此の方面の専門は私唯一人と云う有様」、と学んだ学問が少しでも生かせる任務に木村が喜ぶ状況が目に浮かぶ。だが占領地で広く住民の民政に接し名前を覚えられるのは危険である。学徒兵木村の喜びは暗転する。図録を見るたび痛ましく、胸をふさがれる思いである。

（おかだ・ひろし／わだつみのこえ記念館館長）

の折柄、無理云って済みません。それから、もし家内に急病とか、死亡とかで私に電報打つ様場合は、町長より公電として打たねば駄目です。参考迄にお知らせします。附近の家の皆様に呉々も宜敷くお伝へ下さい。では又、一家御奮斗の程を祈ります。敬具

写真　水泳

木村（きむら）　久夫（ひさお）

1918年（大正7）4月9日生。
大阪府出身。高知高等学校を経て、1942年（昭和17）4月、京都帝国大学経済学部入学。
1942年10月1日、大阪の陸軍中部第23部隊入営。
1946年5月23日、シンガポールのチャンギー刑務所にて戦犯刑死。
享年28歳。

木村斐野宛軍事郵便はがき
一九四三年、佐世保郵便局気付発信

其の後もお元気の事と存じます。私も至極元気、勤務に服して居ります故　何卒御安心下さい。さて小生昭南に寄港以来我（が）部隊の通譯を務め、任地に来て以来も、専ら通譯、及（び）飜譯、及（び）現地民の監督に当って居りましたが、最近当地方に民政部が創設され、私が指摘され今では部隊より離れて、其の方の仕事に当ってゐます。朝から晩まで讀む物、書く物、話す事皆々英語ばかりなのです。

部隊に居た当時は、全く専門の事はやりませんでしたが、此処へ来てからは全く専門に属する事なので、仕事に力が入ります。当地の経済状態、商業状態・政治・民族の社会科学的の観察が只今の私の仕事と為ってゐます。殊に此の方面で専門は私唯一人と云ふ有様なので、任務責任重大なると共に多忙なる事御想像以上です。之は飛行郵便で早く到着しますから、必ず御使用下さい。未だ内地からの初便りも頂いてゐないと云ふ状態です。父上はお元気、御機嫌良ろしいか。朗かに日々を送られる事をお祈りしてゐます。草々

遺墨
田邊元著『哲学通論』〈岩波全書〉余白に記入

［本文１ページ］　［扉ページ］